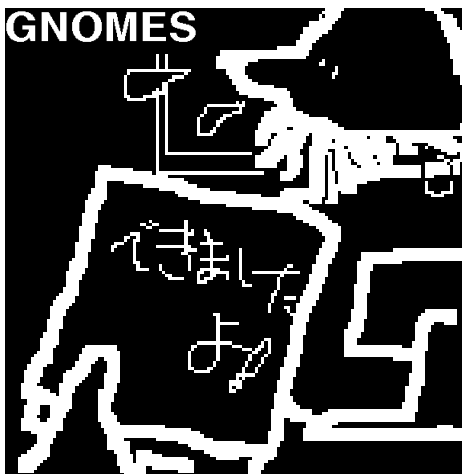


# ノーム通信88 2003-10

〒130 0026 東京都墨田区両国4-30-4-1109



このところ毎日農業の近未来の展望と対策をかんがえていて、さっきやっとおおまかな進むべき方向をまとめて送った。細部はまだ膨大な歴史、文化、産業にわたる基本資料の見直しをしてつめなければいけないけれどもとりあえず一山越した。

ほっとしたが毎月「建設物価」に連載を書いていると20日頃は実にスリリングで、毎月この日前後に刷り上がった本が届くのだが、それが届いてしまった。それはつまり次を書かねばならないということであって、新しい本を見るのも恐い。毎月ページ数や内容は決まってい

ないから、ゼロから考える。さて一体俺は何を書いたらいいんだと天を仰いでしまう。まあ、どうせ「グノメス」君がページのあちこちに出没するほとんどイラストばかりのページだがそこはやっぱり専門誌だからそれなりの体裁も整えないと悪いし、もう仕方ないから力任せにぐいぐいと書いていってしまっただうまとまるかは神のみぞ知るといったところで7頁くらいを書き進めます。しかし何を書こうかと考えてみると今まで色々な仕事をしてきたことに気がつきます。ヘルメットをかぶってどぶの中を這い回ったり、かなり高い橋脚の上へ登って足場の悪い橋桁をへずって調査をしたり、橋をかけたり、図面を書き続けたり、デザインをしたり、看板やチラシやパンフレットを作ったり、今は一地方の農業分析とこれからあるべき姿を考えている。「私はこうなりたい。」と信じてひたすらにその道を突き進むやりかたもかっこうがいいけれども、人の求めにその都度に対応していても結構なんとなくそれなりに道は出来るものだ。いかにも先が見えず、ふらふらと頼りなげにやってきたようだが、やってきた仕事の筋は通っていると今ならわかる。なんというのか、飲み屋のチラシを作っているときも、駅前広場の計画をしたり、市営霊園を考えたり現場で這い回っていても、いつも一つの考えが通っていた。それは大したものではないのだけれど、人間への好奇心、それも今まで生活してきたすべてを尺度にしたものを見る目を信じて、まだ目の前にない未来を目の前にあるかのように想像し、好奇心いっぱい、人が暖かい心で過ごせる空間にどう近づけさせるかと考え続けた。専門的な技術や知識は必要なら勉強し訓練し手に入れればいいけれども、まっとうな日常の暮らしからにじみでるまっとうな考え方は本で勉強しても簡単には手に入らない。自分ではこの「まっとな暮らし感覚。」というものが一番大切なものでただそれだけで今までやってきたのだと思う。ただその古式豊かな剣を振り回して大きな風車に突進してはねとばされるドンキホーテのようだと思うことがある。ということでさて今月は「建設物価」へは何を書こうか。それよりどこか請求書を書ける場所はないのか。いつものことで金の借り方ももう馴れたがいかげん安心して飯が食えるようにならないものか。このぶんだと一生このままかも知れないな。

子供達の作文集「まなざし」の来月の編集は11月15日です。手伝いの方はお願いします。ついでに御酉様は8日と20日でまたくりだしましょう。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>  
TEL/FAX 03-5600-0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com

# まなざし



文集「まなざし」

2003-10 191

朝、家を出て小学校の脇を走りぬけ、もくれんの並木を通り、桜並木の下も走りぬけ、国道に出て河川敷きのグラウンドに向かう少年野球の一团を追い越し、大きな川を渡り、いつもいるぼろ雑巾のようにうずくまった犬の脇をひかないように走りぬけ、山谷の職安や金貸しますという看板やうつろな目をしたくたびれたおじさん達の脇も通り過ぎ、昨夜の賑わいが過ぎてうらびれた吉原大門や古い商店街、黒くすすけた昔からのてんぷら屋や肉なべ屋をかすって、浅草の観音様にさしかかります。向こうから刀を二本さした侍が歩いてきました。どこからどう見ても侍ですが、腰の帯の上にウエストバックを付けているのがちょっと違和感があります。ちんどん屋さんの出勤かな。もう少し走ると、仁王門の前では車引きのおにーちゃんやおねーちゃんがたが客を待っていて、競馬の場外馬券を買いに来たおじさん達が新聞と赤鉛筆をもって歩き回り、台湾や北京から来た旅行客をいっぱい乗せた観光バスが走りすぎ、また走ると高速道路の下はホームレスのおじさんおばさんがたくさん空き缶を集めていたり煮炊きをしているところが続き、もう少し走って、隅田川を渡ると、川面は青く広々と広がって屋形船がたくさんもやいであって、観光船や小さなタンカー、ゴミを運ぶ船や長いいかだなどが行き来している中をカワウが水にもぐり、かもめがさわぎ、両国の国技館の前で横断歩道を渡ると全国民謡大会でたくさんの方がのどかな顔で集まっていて、駅前的小道に入ると立浪部屋の土俵から重い「どしん。ばしん。」という音が掛け声と一緒に響いてきて、力士たちが砂まみれで戦っている姿が見えます。力士のびんつけ油の香りに気付くと若い力士がゆかたにはだしで買い物に走ってゆき、ライオン堂の前を渡って寄席幟がはためく古ぼけた建物につくとそこがやっと私達の事務所です。

毎日1時間ママチャリで走っているとたくさんの方の生活が目に入ります。街は実にダイナミックで面白い。もう10年走っていてまだ見飽きない。それは景色ではなく人間の営みが飽きさせないのだと思っています。その好奇心があちこちへ引っ張って行き、また新しい友達が出来て、ふっと気付くと、事務所でネパールのガイドが居候していたりみんなで笑ったり歌ったりしていたりします。

毎日目に付くことをただ通り過ぎさせずに大切にいとおしく見てゆきたいと思っています。